磯前順一『宗教概念あるいは宗教学の死』

東京大学出版会，2012 年 7 月刊，288 頁，4,000 円（＋税）

中村　芳雅

１．本書の概要

本書は宗教研究者，磯前順一が近年の宗教学で問題とされる宗教概念論の整理とその問題性の指摘，そしてその発展可能性を模索したものとして見る事ができる。磯前は前著『近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道』（2003 年）で「議論の現状でいえば，代替概念として望ましいものは何かという同意どころか，その前提となる概念自体の役割をめぐる議論から固めてゆかなければならない」（８頁）と述べている。この視点は現在の宗教学でも引き継がれるところであり，また日本の宗教学において問題とされる宗教概念論は，この論に共通するところが少なからずあると考えられるだろう。本書はこの前著から約 10 年を経て出版されたことになるが，その内容にはこの年月の間に起きた宗教概念論，そして宗教学の変化が如実に表れている。

本書で磯前は，西欧中心主義的な宗教の概念では包摂できない非西洋の空間を同じ宗教という語りで理解する道を模索したい（５頁）と述べている。既に多くの研究で述べられているように，宗教という概念は西欧由来のものであり，日本独自のものではない。このため，宗教概念論を冠する研究には，宗教概念の普遍性そのものを批判する論も少なからず見受けられる。しかし，磯前の論はこれらの宗教概念論とは一線を画するところにあると言えるだろう。磯前は「たんに非西洋社会におけるプロテスタンティズム的な宗教概念の移植を指摘するだけでは，新たな生産的な議論を生み出さない行き詰った状態に近づきつつある」（ii 頁）と述べ，ただ宗教概念の西欧中心的性質を指摘するに留まらず，そこから更に現状の宗教概念の限定性を承知した上で生産的な議論を可能にする領域を模索している。「プロテスタンティズム的な理解に同化された私たちが，どのようにして認識論的かつ身体実践的にその規制力を脱却し，新たな宗教的あるいは非宗教的な主体を再形成していくという課題に応えていくか」（iii 頁）というフーコー的な主体形成に焦点を当てつつその主体の再形成を目指す試みには，宗教概念をこのような西欧的な限定性から解放しようとする目標があると考えられるだろう。

以上の観点から，磯前の研究は宗教概念の構築により私たち日本人の主体がいかに形成されたかという問題を基点に発することになり，本書で挙げられる多くの研究内容は全てこの論点を基軸にして展開される。これは宗教という概念の脱構築の試みとして受け止められるが，磯前が目指すところは宗教概念の否定ではない。宗教の概念が構築される過程で，人間の主体がどのように形成されてきたか。そしてその主体が形成される過程で取りこぼされたものをすくい上げる。

宗教が近代西欧のプロテスタンティズムの枠に留まるかぎり，その排他性と限定性を離れることはできない。しかし，その宗教概念が非西欧で受容される過程を脱構築することで，宗教から取りこぼされたものをすくい上げる。こうすることで宗教を西欧から切り離し，非西欧でも対話可能な場として再構築する。磯前の研究は，宗教の概念が日本に受容されることでその宗教として認識された領域が変容した過程を追い，そこから宗教概念の近代西欧的性質ゆえに抜け落ちてしまった部分を見出し，その欠落した部分から近代西欧にとらわれない新たな宗教の可能性を模索しようとする。これが磯前の考える「生産的な議論」だと考えられるだろう。

以上の研究の特性から，磯前の否定するところは宗教の排他性であり，普遍性ではないと考えることができるだろう。磯前の目指す宗教概念は非西欧でも対話可能な場という意味での普遍性を持ち，それは自己の宗教のみを絶対視することで他者を排斥してきたこれまでの宗教概念とは異なる。本書で述べられるいくつかの研究は，全て以上のように宗教概念を通じて人間の主体の構築過程の変遷を明らかにし，その変化の過程で取りこぼしたものを追うことを試みている。そこでは普遍的と思われた宗教の概念の不完全性を暴露することになるが，磯前の目標は宗教概念の構築過程で取りこぼされたものを認識しなおすことにあり，そして更にその先に西欧のプロテスタンティズム的な宗教とは異なる非西欧でも共有できる包括的な宗教概念を再構築することを試みている。このようにして宗教概念を脱構築することで，これまで問題となり続けてきた近代西欧に限定された排他性を持つ宗教概念ではなく，より包括的で普遍性のある概念としての宗教を見出すことが出来る可能性がある。そしてそのような過程を経て見出された宗教概念によって，世界はより西欧に依存しない対話の場を作り出すことが出来るだろう。

以上が本書で述べられる磯前の論の大枠になると考えられる。磯前の研究は様々な資料に基づく詳細な検討の結果に基づき，それだけでも研究報告として眼を見張るものがあるが，その研究内容は全て西欧中心的な宗教概念の限定性を解放する試みとして見ることが出来る。もちろん，これは本書の研究内容が妥当性を持たないということではなく，むしろ歴史学の素養を持つ磯前だからこそ可能な，詳細な資料の検討に基づいた正鵠を射た貴重な議論と言えるだろう。しかし，本書評では具体的な研究内容には立ち入らず，敢えて宗教概念論に焦点を当て本書を検討してみたいと思う。

２．本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

はじめに　宗教的想像力への跳躍

I　宗教研究の突破口

１章　宗教を語りなおすために　宗教研究とポストコロニアル状況

２章　宗教概念論を超えて ポストモダニズム・ポストコロニアル批評・ポスト世俗主義

３章　宗教概念あるいは宗教学の死　宗教概念論から「宗教の回帰」へ

II　日本の宗教学と宗教史

４章　〈日本の宗教学〉再考　学説史から学問史へ

５章　多重化する〈近代仏教〉　固有名のもとに

６章　〈日本宗教史〉の脱臼　研究史素描の試み
III　宗教概念と神道，そして天皇制
７章　近代日本と宗教　宗教・神道・天皇制
８章　逆説的近代としての神道　近代知の分割線
９章　神道的エクリチュールの世界　版本から活字本へ
10 章 いま，天皇制を問うこと
補論　植民地朝鮮と宗教概念
あとがきにかえて

３．本書の内容

上記のように，本書は大きく分けて三部構成から成り立っており，それぞれに各部のテーマに即した章が付属している。それ故，本書は大きく分けて三つの観点から論を展開するものであり，その三つの観点にそれぞれ複数の章で個別の視点を与えている。ここではその三部構成の論点と，そこで与えられた章別の視点をまとめることで，本書の全体像を整理したい。

第Ｉ部「宗教研究の突破口」では現在の宗教学の持つ問題を整理すると同時に，そこから見出し得る展望を示唆している。１章「宗教を語りなおすために」の内容は，磯前の前著『宗教を語りなおす――近代的カテゴリーの再考』(2006 年）ともいくらか共通している。磯前は本章で「たんなる宗教概念や宗教学の批判に終始することなく，同じ宗教という語りのもとでも，西洋中心主義的な言説に蔽い尽くされきることのない非西洋的な空間――そのような非西洋性は西洋の内部にもいたるところに存在する――に対して，どのような言葉を与えていくことができるのか，そのような問題を考えてみたいのである」（５頁）と述べている。これは磯前の基本的な研究目的を明確に示すものと見ることが出来るだろう。磯前はただ，宗教概念の構築過程を検討することでその矛盾や虚構を指摘するのではなく，その構築過程で宗教から取りこぼされてしまった領域を再検討し，それを西欧中心に展開される宗教概念と照らし合わせることで，近代西欧から離れた新しい宗教概念を模索していると受け取ることが出来るだろう。

次に，２章「宗教概念論を越えて」では，日本宗教学の現状と問題を欧米の研究動向と比較することで明確化している。日本宗教学の現状について，「そこでは宗教を独立した主題として取りだそうとする意識が低下し，依然として宗教学の伝統的な自己意識の純粋性に求める動きが存在する一方で，その反動からか無自覚に歴史学や社会学の模倣をして社会制度論に還元しようとする動きが，相互の関係付けもないままに呉越同舟している」（18 頁）と磯前は述べている。すなわち日本宗教学では，宗教を他の領域からは独立した純粋性を持った主題として扱う研究と，宗教の近代西欧的性格を認識した上で宗教学以外の見地から宗教とされるものを分析する研究がそれぞれ同じ宗教学として語られていることになる。これに対して，北米の宗教学では決して両者の関係は必ずしも対立的なわけではなく，相補的な関係になっていると考えられる（22 頁）。磯前は様々な研究者を紹介することで，北米の研究動向がポストモダン，ポストコロニアニル批評，そしてポスト世俗へと推移していく背景を整理している。北米の宗教学は，プロテスタンティズムに偏った宗教概念の普遍性を歴史主義的に批判するポストモダンの動きにはじまり（24

頁)，植民地における知と権力の関係を問うポストコロニアル批評に至った（26 頁)。しかし，これらは西欧中心的な宗教研究を拒絶しているものの，宗教概念そのものを問題にする視点を持っていなかった（27 頁)。宗教概念そのものを問題にすることは，すなわち近代以降に自明視されてきた「理性的な認識主体による認識対象の客観的かつ本質主義的な把握」に対して懐疑の眼差しを向けることに当たる（29 頁)。磯前はタラル・アサドの研究を評して，「アサドはそのようなプロテスタンティズム的な宗教言説を超えて，どのように私たちが自分たちの主体やエージェンシーを構築していくかといった点に議論の最終的な目的を有している」（36 頁）と述べている。これは近代西欧を中心に展開した宗教言説が普遍的ではないことを問うことで，ただその無効性を謳うのではなく，そこから我々の主体（あるいはエージェンシー）を探ろうとする試みとして読み取ることが出来るだろう。欧米の宗教研究は以上のように，近代西欧の普遍主義を問うことから，その普遍主義に飲みこまれていく非西欧人の主体構築を問うことへと焦点が移されつつある。これに対して，日本の宗教研究では「かろうじて宗教概念論の議論を受容したものの，その背景にあるポストモダンやポストコロニアリズムの議論を北米同様にきちんと咀嚼することはできなかった」と磯前は論じている（38 頁)。日本の宗教学においてポスト世俗化論は，その一面に持つ啓蒙主義を批判する性格により，宗教復興を称揚する言説として受け止められることになった（41 頁)。しかしポスト世俗主義が問題とするところは，まさにこの世俗との二分法の中で生まれた宗教の概念の非普遍性にある。「日本のポスト世俗主義者は，宗教が私的領域のみならず公的領域にまで浸透しているとするが，世俗との二分法のもとに生まれた宗教という概念で日本の社会をすべて理解し尽くそうとするその願望は，やはりやみがたい人間の普遍化欲求として批判的にとらえ返されていくべき」（42 頁）と考える磯前の論は，宗教を世俗との二分法で分離可能な領域とはせず，むしろその二分法の近代西欧的性質によって形成された主体の問題性を問うものと考えることが出来るだろう。以上が現在の日本宗教学の問題であり，この内容から磯前が自身の研究で何を為さんとしているのか，その意味と目的を推測することが出来るだろう。

次に，３章「宗教概念あるいは宗教学の死」は本書の題名とも一致しており，内容的にも本書で最も重要な論点を示す部分として考えられる。磯前は「研究者がなすべきことは，西洋的な宗教概念への同化かその排除かといった二項対立的思考をとることではなく，同じ宗教という言葉のもとに読み替えられていった概念の変容過程を，言語化することで対象化していく」ことであると述べており，これは磯前の主張の根幹に当たるものと考えられる（57 頁)。宗教概念は近代西欧に強く支配された概念であるが，その概念が日本で有効か無効かを問うことではなく，むしろ日本に受容された宗教概念が変化していく過程を追うことで，その概念の限定的な性格を明確化していくことが必要になるだろう。それは宗教概念を否定することではなく，むしろその限定性を描き出すことで，西欧中心主義に偏らない宗教の可能性を見出すことに結びつく。磯前は，プロテスタンティズムに基づく人間の意識に偏った宗教概念では，長い歴史の中で人間が神という超越的なメタファーを必要とした理由を見落としてしまう，と指摘している（64 頁)。この問題に対して，磯前は人間同士がお互いをつなぐために「信」が不可欠とするデリダの論を踏まえて，「人間と人間を結びつける媒介者として，メタファーとしての神の存在が必要になる」という神解釈を展開する（69 頁)。このような文脈で用いられる神は，キリスト教で語られる救済を

保証する存在ではないが，あえてそのような救済を保証しない中で信ずるという行為に賭けることで，「他者との関係性，そして自己との関係性もまたはじめて可能になる」と磯前は述べている（72 頁）。磯前が「個々の文化・宗教的伝統は相容れないものである，自分の帰属する宗教伝統は独自のものであるという言説自体が，むしろおたがいの理解にとって壁を作りだしてきた」と問題を提示した上で，「自分の文化・宗教的アイデンティティを絶対視することなく，異なる互いのコミュニティの価値観に対して一歩踏み込み，自分との違いと共通性を深く認識し，アイデンティティを流動的に変化させながら，ともに共存する場を『同じ人間』どうしの関わり合いとして模索していくべき」と論を展開するのは，まさに彼の神解釈が示すように他者との関係性を構築する次元として宗教の普遍性を必要とするためであろう（75 頁）。以上の内容から，本書における磯前の関心は，本章の最後に述べられる「普遍性とは，むしろ自分の立場を批判的に捉えるなかで他者との共存を模索する交渉の場であるのだ」という言葉にあると考えることが出来るだろう（77 頁）。

第 II 部「日本の宗教学と宗教史」は第 I 部の論に基づき，日本の宗教学史および宗教史から主体が構築される過程を分析しており，そこから宗教概念をいかに展開していくべきかが論じられている。4 章「〈日本の宗教学〉再考　学説史から学問史へ」で磯前は近代の宗教学を読み解く必要性を論述する。磯前は近代以降の宗教学は，西欧的な宗教概念をいかに日本に適応させていくかという動きと，いかに西欧の宗教概念を読み返していくかという課題を同時に担ってきた点を指摘している（98 頁）。このため，日本の宗教学は諸宗教に中立的であっても，宗教の固有性という理念に対して中立的ではなく，常に自身の立場をその理念によって特権化し続けてきた。本章最後で述べられる「近代日本における宗教学の歴史はみずからの同一性を確保するためのものでなく，その内部に潜む亀裂と矛盾の痕跡として繙かれ，その軌跡は外部の者へと共有可能な遺産となり，国内外の人々に近代日本の西洋体験の苦闘の轍として読み継がれていく可能性を切り拓くものとなりうるはずである」（113 頁）という言葉が示すように，近代日本で宗教概念が展開していく過程を検討することは，まさにその近代西欧的性質が持つ矛盾を示唆することになると考えられるだろう。

5 章「多重化する〈近代仏教〉　固有名のもとに」では，4 章で宗教学を対象として語った理論を仏教において展開した上で，その中で近代的概念が共有可能な場を作り得るぎりぎりの可能性を見出している。近代以降の仏教は，西欧人の宗教概念を内在化させることで教説を西欧化していった。「近代の諸宗教は，仏教諸宗派だけでなく，キリスト教にしても，新宗教にしても，制度的にも学問的にもこの宗教学をみずからの内部に取り込むことで」（135 頁），共通に会話が可能となる宗教という次元を作り出すことが出来た。しかし，ここで想定された次元は近代西欧的な宗教概念の性質を受け継いだものではあるが，「非近世日本的かつ非キリスト教的な異空間を，近世日本的かつキリスト教的な制約の内部に見出そうとする可能性」（138 頁）を持っていたとも考えられる。磯前は「近代『仏教』がもはや近世的『仏法』ではありえないという歴史性を指摘することによって，その文化的起源に回帰したり，歴史的制約の外側に自分がいると錯覚するのではなく，その制約の内部に身を絡めとられながらも，その余白を思い起こしていくことになるであろう」（139 頁）と述べ，近代仏教が宗教概念を受容していく中で見える余白の可能性を

示唆することで本章を閉じている。

6 章「〈日本宗教史〉の脱臼　研究史素描の試み」では，「日本宗教史」という言葉に内包される「日本」と「宗教」という二つの言葉が〈西洋超越的なもの〉と〈土着的なもの〉をどのように組み合わせてきたか確認している。西洋超越的なものは，「知識人たちが個我の形成を推し進める手段として重視されてきた」（152 頁）一方で，キリスト教的な意味での罪の概念は絶対人格神に訴えることなく，人間の苦悩の中に見出され，そこから仏教思想を通して救済の道が模索されていった。また，日本の土着宗教と考えられた神道は，海外から伝播した文化の土着側の反応として近年では理解される。近代の国家神道はこのような神道の形態に加えて，「天皇制を軸とした神社崇拝と宮中祭祀を結びつけるかたちで，西洋の宗教概念および信教の自由を封じ込めるために社会制度として整えられてきた」（159 頁）という側面を持ち，近代天皇制に仮託された純粋日本という理念は，諸宗教の信仰者や宗教学者に排他的な態度をもたらすことになった。しかし，この〈西洋超越的なもの〉と〈土着的なもの〉の関係から，超越的なものが土着的な領域に内在すると考えることが出来るだろう。また，土着的なものにも超越化の要素は内在しており，同時に超越的なものが土着化の契機をはらんでいると言うことも出来る。「超越的なるものと土着的なるものという枠組み自体が，日本が西洋世界に組み込まれるなかで分節化されてきた認識の布置であり，その枠組みから出発しながらも，それを乗り越えていく語り」（169 頁）を求めることに，磯前が本章で日本宗教史を研究した主題を見ることが出来るだろう。

第 III 部「宗教概念と神道，そして天皇制」では近代神道が国民の主体を形成する過程を明らかにした上で，日本の近代宗教を研究する宗教研究の役割を論じている。7 章「近代日本と宗教宗教・神道・天皇制」では，現代の日本人が「宗教」という言葉に馴染みつつも，自分たちを「西洋的な意味では非宗教的な世界観の持ち主」（178 頁）と規定するようになった過程を追究している。磯前は，宗教という言葉が用いられるようになった明治 10 年以前には「私的領域と公的領域といった区分をもたない，近世以来の『教』あるいは『大教』という言葉が一般に用いられており，このような〈私的／公的領域〉といった二分法自体が，近代の西洋世界から内的領域と結びついた宗教という言葉とともに，〈宗教／世俗〉という二分法的な概念――私的領域である宗教とは区分された非宗教的な世俗としての公共領域の成立――が移植されるなかで成立した理解だということができる」（183 頁）と述べることで，公私の二分法が宗教世俗の二分法から形成されたと論じている。その上で近代の神道は，近代西欧の宗教概念の受容を拒否してみずからを道徳化することで公的な近代国家を支える基盤としながらも，同時に個人の内面化という私的領域の論理だけは宗教概念から学び取っていった。この過程で日本の宗教概念はプロテスタンティズム的な私的領域を後退させ，公共宗教としての側面を強めていくことになった。このように，天皇制を拠りどころとして近代日本に〈私的／公的領域〉と〈宗教／世俗〉の関係が形成されたということが，本章の問いに対する結論に当たると考えられるだろう。以上の点をふまえて，磯前は本章の最後に「近代日本において宗教概念の受容のあり方を考えるということは，たんに個人の内面に注目した私的領域として宗教を論じるだけでなく，神道を支えとする天皇制がどのようにしてプロテスタント的な宗教概念を脱臼させていったのか，その結果として日本社会がどのような変化を被ってきたのかという問題までを射程において思考をめぐらすこと」（188 頁）と述べ，

近代天皇制を問う意味を論じている。

8章「逆説的近代としての神道　近代知の分割線」では，近世神道が明治に入って道徳と宗教に分裂していく過程を明らかにしている。この分裂と近代的な啓蒙思想によって，道徳は宗教に対して優位に立つことになった。神道を宗教と分離しようとする神道学の言説はこのような道徳と宗教の関係に端を発してきた。神道学はそれ故に道徳という超歴史的主張を行っているにも関わらず，道徳と宗教，西洋的言説と非西洋的言説という明治時代に成立した分割線を前提として生まれた近代の逆説的な動きと言うことが出来るだろう。このことから磯前は，「今日では戦前の神道研究は，反動的とするか伝統的とするかの，単純な評価基準のなかで語られがちだが，そのような選択肢をあたえている場自体が，明治以降に形成された歴史的産物」（196頁）と述べて論をまとめている。

9章「神道的エクリチュールの世界　版本から活字本へ」では，近世の神道諸派が展開した様々な文書を検討することで，人間の意識とは異なった領域で主体が構築されてきたことについて論じている。磯前は近世の様々な国学者の記した版本を参照することで，その形態が一定ではないことを明らかにしている。それらの文書は，擬古文から和漢混淆文，漢文から和文，そして楷書から連綿体といった様々な文体で記されており，特に平田派では神代文字が用いられていたことを挙げ，これらが当時の国学者の思想的表現行為であったと述べている。このような表現は読み手の主体形成にも関わるが，庶民が必ずしも複雑な文体に親しんでいたわけではなく，通俗本では書き手特有の文体が消え去り，読者主体の和漢混淆文のみになっていた。そして明治22年に大日本帝国憲法が制定される頃には洋装活字本が一般化しており，国家権力とはかかわらないところで活字印刷に都合のよい和漢混淆文が文体として用いられるようになっていった。「印刷文字の主流をなす明朝体は，『言葉の存在だけを残し，形象的存在感を限りなく削ぎ落とした形状』として，エクリチュールのもっていた存在感を消失させるに最もふさわしい書体であった」（217頁）と述べるように，近代以降の活字化は近世の神道諸派の文体による思想的表現行為を喪失させることになった。この動きは，「啓蒙というかたちでの思想の作り手による，受け手への覆い尽くし欲求に支えられたもの」であり，「身体から切り離され，純化した思想はビリーフ同様，その透明で中立的な装いのもとで，特定の政治的イデオロギーによった主体を均質化させる役割をも果たしてきた。一方で，思想を欠いた身体は，みずからの欲動に呑み込まれ，時の政治権力によっていともたやすく馴化されてきた」と，近代神道が文体表現を失って意識面からのみ主体を構成していく問題を提示している（218頁）。

10章「いま，天皇制を問うこと」では，近代以降の天皇制が日本人の主体化形成にとって超越的根拠として機能したと論じられている。磯前はカール・シュミットの例外的状態の概念を用いて，天皇制が世俗とは切り離された超越的な権威を有していたと述べる。天皇制は，他民族を包摂し得ない近代以前の神道とは異なり，普遍性を持って他民族に崇敬されることが可能となる。戦後，他民族の同化原理は神道指令と共に瓦解することになるが，依然として日本国内に留まった沖縄やアイヌの存在は等閑視され，単一民族国家としての日本という幻想が成立することになった。このような視点を提示した上で，磯前は「依然として天皇制こそが例外状況を作り出す，日本人にとっての法外な主権者であり続けて」おり，それゆえに「私たちはなおも天皇制という

主体形成の超越的論拠を必要とするのか，それともそこから新たな自己批判的な主体化形成のあり方を模索しようとするのか，今いちど考えていかなければならない」（232 頁）と天皇制を主体化形成と結びつけて研究する必要性を主張している。

以上が章別にまとめた本書の内容となる。いずれの内容も主体化形成に注目したものであり，それぞれ多岐に渡る観点と研究により論が展開されており，今後の研究に寄与するところは多いのではないだろうか。しかしそれ以上に，全ての研究で主題となる主体化形成の問題はただ日本人の主体が作り出される過程を述べるに留まらず，そこから近代性の持つ限定性に焦点を当てることが重要なのであって，今後の宗教学ではこのような近代性をいかに超えるかが問題になると考えられる。本書で挙げられた研究はいずれもその方向性を示唆するものであり，その意味でも本書に記された研究は参考になるところが多いと考えられるだろう。

４．本書の意義と課題

これまでの述べてきた内容を繰り返すことになるが，本書の論点は宗教概念論を通じて主体形成の過程を分析することにはじまる。

磯前の論は，現代の宗教概念が持つ西欧中心主義的な限定性を乗り越える試みとして，重要な意味を持つと言えるだろう。磯前は宗教概念の構築過程を通じて，その近代西欧的な性質ゆえに見落とされることになった領域に焦点を当てる。例えば，これまでの宗教概念が人間の意識を中心として展開してきたことにより，日本の仏教や神道も人間の意識に本質があるとする論が近代以降に強く唱えられてきた。そのため，宗教概念の展開とそれに基づいて語られた宗教諸派の言説を再考することで，宗教概念の持つ近代西欧的な性質とは異なる「宗教」の余白を模索しようと磯前は試みる。ここで想定される新しい「宗教」は，これまでの宗教とは異なり，より広範に適用可能なものとなる可能性を持つ。このような磯前の論は，近代西欧的な「宗教の固有性」に固執することなく，近代西欧を越えて世界規模で適応しうる「宗教」という対話領域を作る，画期的な議論として見ることができるだろう。

また，このような磯前の論は，宗教概念を近代西欧的な意味での「宗教の固有性」と切り離しつつも，普遍性という側面は決して放棄していない。これは，宗教概念論が陥りがちな宗教の非普遍的な性質を指摘するに留まるニヒリズム的な性格とは一線を画すると言えるだろう。磯前が否定するものは，近代西欧的な宗教概念の持つ限定性と排他主義的な性質，そして固定化された宗教概念が普遍的にどこにでも適応可能とする普遍主義であり，これらは普遍性と同一ではない。宗教概念に限らず，様々な概念は普遍性を有しているために世界的な対話の場を形成することが出来るのであり，概念や普遍性を否定したところで結局それは完全な普遍性を持つ領域を作り出すことにはならない。確かに現代の宗教概念は近代西欧的な限定性を持った非普遍的なものであり，世界的に適応可能なものとは言えない。磯前の論は，ここでただ宗教を非普遍的なものとするのではなく，より普遍性の高いものにするためにはどのようにすればよいか，という議論とその具体的な打開策を唱えるものであり，かつ宗教概念のニヒリズム的な否定にも留まらない，積極的な議論と見ることが出来るだろう。

これまで述べてきたように，磯前の論は宗教学の今後の展望を見通す上で，極めて重要な意味

を持つ議論と言えるだろう。評者も上に述べた磯前の議論とその意義には大部分において同意する。現在の宗教概念は確かに西欧中心的な限定性を持つために，世界規模で適応可能とは言えず，分析概念としての妥当性は非常に疑わしいところがある。それ故に，「宗教の固有性」に留まる研究で対象を分析することが出来るのか，またそのような研究が結果としてこれまでの宗教概念が持つ近代西欧中心主義的な普遍主義を称揚することに結びついてはいないだろうか，という問いはこれから論じられていく必要があるだろう。ここで磯前の論は，宗教概念論を宗教の非普遍性を指摘する場ではなく，その不足部分を補うことでより高い普遍性を獲得する場と捉える試みとして理解することができ，まさにこれこそが現代の宗教学に求められていると評者も感じている。

しかしこの議論には同意するところが多いゆえに，その将来的不安とも言うことが出来る疑問点がいくつかある。そのため，最後に評者から本書に対して三点ほど，些細ではあるが疑問点を述べさせて頂きたいと思う。

第一に，近代西欧的な宗教概念が見落とした部分に焦点を当てる研究として，磯前が宗教体験論に注目している点に疑問を感じられた。確かに近代西欧的な宗教概念論が人間の意識を中心にして展開したものであることは事実であろう。しかし，近代中心主義的な宗教概念が見落としてしまった領域は宗教体験によって見出しえるものであろうか。これが特に近代以前の西欧社会に限ったものであるなら，宗教体験からその余白を見出すことは十分に可能かと思われる。なぜなら，近代以前には宗教という領域に含まれた体験が，近代以降になると意識中心の宗教概念が一般化したことにより宗教には含まれないものになった，という論を展開する余地は大いにあると思われるためである。これは近代以前の社会にも宗教という領域が存在していた西欧だから通用するものの，非西欧の領域においてはそうはいかない。西欧では近代以前の宗教の領域と近代以降の宗教の領域の変化を推測できるかもしれないが，非西欧においてはまず近代以前の宗教の領域を特定することから始めなければならない。近代以前の社会に宗教概念が存在しなかった以上，そこに宗教体験を見出す主体は近代西欧の宗教概念を受容した近代人ということになってしまい，必然的に何らかの体験を宗教体験として認定する主体を検討する必要性が生じてくる。もちろん，近代以降の日本で宗教体験として捉えられたものが，伝統的な体験から意識面のみを強調したものであり，それ以外に持っていた身体的な側面を喪失したということは実際にあっただろう。しかし，近代以前において，その体験を宗教体験として保証するものは一体何者であろうか。具体例を挙げれば，能や歌舞伎といった身体的な芸能の中に見出される宗教性は一体何者によって保証されるのか。「宗教の固有性」が保証されないのであれば，これらが芸能の話であり，宗教とは別世界であると言う事も出来ない。実際に，これらの芸能には脚本に限らず多くの部分で「宗教的」と思わせる部分があるが，この「宗教的」であることを保証するものも近代の構築物に他ならず，また芸能と仏教等の「宗教」を区分するものもまた近代の構築物に他ならない。このことから，非西欧における宗教体験の研究はその体験がなぜ宗教体験と言われるのかという言説研究が必要になり，結局これは宗教概念自体の研究の目標に還元されるのではないか。むしろ，敢えて体験を見る上で宗教体験という側面に注目することにより，西欧的な宗教の神観念による普遍主義を作り出してしまう危険性も持っているように感じられる。

第二に，近代西欧主義的な宗教概念によって見落とされた余白を見出していってその不足を補っていったとき，そこで作り出されるものは無限に拡大される理解不能な領域になってしまうのではないかという点が疑問に感じられた。例えば，先に挙げた例を用いれば，能や歌舞伎といった芸能の中には確かに「宗教的」と言われる部分はある。しかしその「宗教性」を保証するものは近代的な宗教概念に他ならない。仏教や神道，儒教においても同様であろう。それでは，能や歌舞伎を仏教，神道，儒教と別物として境界を引くことは何によって可能となるのか。それこそ，近代的な宗教概念に他ならず，同時代の視点ではもっと違った基準でそれぞれを見ていたのではないだろうか。結局，宗教を宗教と定めるものは西欧的な宗教概念に過ぎず，ここでこの宗教概念を乗り越えた余白を見出そうとするとなると，それは無尽蔵に膨らみ続ける可能性がある。「宗教」とされる領域の外にも「宗教的」と思われる領域はいくらでもあるが，それを「宗教的」と判断する基準は西欧近代的な宗教概念に他ならない。仮に，ここで見出される「宗教性」はただ「宗教性」に過ぎず，仏教や神道といった「宗教」とは異なると言ったとしても，それを峻別する基準もまた近代西欧の宗教概念に還元されることになり，そこには「宗教の固有性」が見え隠れすることになる。結局この問題はどこまでが宗教でどこまでが宗教ではないかという基礎的な議論に落ち着くところになり，西欧的な宗教概念の不足を定めるために必要な，どこまでを宗教とするかという問題は，結局個人の恣意に任されることになってしまうのではないだろうか。そうでなければ，「宗教」とされる領域を遥かに超えた，能や歌舞伎などの芸能まで含んだ無限大の宗教領域が出来てしまうのではないか，という不安が評者には感じられた。

最後に，磯前の論で主軸に据えられる主体の構築過程について，そもそもここで指されている主体が一体何者であるかを考える必要があるように感じられた。本書は基本的に日本を対象にしているが，どこまで日本という主体は一元的に捉えることが可能であろうか。もちろんここで磯前が日本を一元的に見ていると言うわけではない。しかし，一元化不可能な存在を相手に主体形成を論じることは果たしてどこまで有効と言えるかは考える必要があるだろう。主体の存在を前提としなければ主体形成論は成立しないが，しかし同時に一元化した主体が実在するかどうかも疑わしいのではないだろうか。そのように考えたとき，主体の形成過程を論じることは，日本人という一元化可能な共通認識があると考えるように，ある種の暗黙の了解がなければ成立しないことになり，その点で最終的には宗教概念の持っていた限定的性格と同じ問題に陥るのではないだろうか。

以上，三点ほど疑問を述べてきたが，それではこの問題をどうやって乗り越えるのかという問いに対する回答が評者にあるわけでもない。恐らくこれは宗教学を越えた学問全般に通用する根源的な問いの一つになるのではないだろうか。もちろん，このような問題に直接向き合うことは極めて困難と考えられるが，宗教研究を進めていけば恐らくこの問題は回避不可能な壁として立ちふさがると思われる。そのため，本書評では磯前の論の意義と可能性を示した上で，さらに将来的に生じると予測される問題を提示した次第である。

５．参考文献

磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道』，岩波書店，2003 年。

磯前順一，タラル・アサド編『宗教を語りなおす――近代的カテゴリーの再考』，みすず書房，2006 年。